

# 平安時代黎明期における記憶の在り方 日本国現報善悪靈異記

仲井克己

## I. 靈異記の基本構造

『日本国現報善悪靈異記』は、奈良時代末から平安時代黎明期にかけて<sup>なら</sup>諸楽右京の薬師寺沙門景戒によって編纂された仏教説話集である。集編纂の指針は、「豊浦寺」（蘇我稲目によって建てられた本朝最古の寺）によって示される

- 1) 巻頭 万葉集と同じく雄略天皇にまつわる説話が配されている。  
朱の<sup>かづら</sup>纒を額に着け、赤い<sup>はたほこ</sup>幡杵をかかげた少師部栖軽が豊浦寺の前を走りぬけ、軽の<sup>ちまた</sup>諸越の衢において天の鳴神を大声で呼ぶ。
- 2) 上5 敏達天皇の時代に、海から渡ってきた霊木（落雷にうたれた楠）で蘇我馬子が菩薩三体を造った。その仏像は、豊浦寺に置かれた。
- 3) 下38 聖武天皇の御代に、朝日さす豊浦寺の西の方向に位置する桜井に沈む白い玉に関する童謡がはやったが、それは光仁朝を予祝するものであった。

靈異記の編纂は、奈良盆地に造成された都が廃され、長岡・山城の地に遷される時期にあたる。井戸の底に沈む白玉は、聖帝を通じて新時代寿福の意味をもっていた。

この時期は貨幣経済が急速に発達したため、靈異記にもその影響が表れている。なかにはバブル経済そのものを描いた話もある。

山背国相楽郡の人が、法華經を入れる箱を造るために諸楽の京で錢百貫（10万文）を払い材料となる白檀・紫檀を得たものの、計測しそこなって經が入らないと知るや集僧を招き「また、木を得しめよ」と祈った。すると、靈験により經典が入るくらいにまで箱が大きくなった。（中6）。

靈異記は、奈良朝末期から平安朝初期にかけて都市空間に生きる人々の生活を直視し、時代に即応した宗教の在り方とともに、時代を意味づけるための記憶の在り方をも問うている。

## II. 靈異記の時代

### II - i. 第一帯水層の水は飲めない！

実際に井戸を掘って感じたことは、確かに地表から 20 m 程度の地中から湧きでる水は 18 度前後で水温は安定しているが、地表の汚染に影響されやすく飲料水には使えないということであった<sup>1</sup>。現在、第一帯水層から飲用水を汲み上げることのできる井戸は、周辺や上流域の自然が保全されるなどの好条件に恵まれた場合だけであろう。

では、奈良盆地北部の山裾を広大な平面にならして、数万人規模の人口を保つことができる都を造り、そこに東大寺などの大規模伽藍を建てたら、第一帯水層はどのような状態になるのであろうか。

### II - ii. 穢臭に満ちた都

平城京は、次の歌によって清らかな美しさを誇っていたと思われがちである。

青丹よし 奈良の都は 咲く花の にほふがごとく 今盛りなり (『万葉集』巻 3・328 小野老)

神亀 6 年 [729] に長屋王が死去してすぐに、小野老が大宰府で詠んだ歌である。望郷の意味もあって美しいイメージで彩られているが、実際の生活環境は廃棄物処理技術がないためかなり厳しいものであった。

環境問題は、藤原宮時代からの課題であった。「京城の内外に多く穢臭有り」(『続日本紀』慶雲 3 年 [706 年] 3 月) と記されているように、本朝で初めて造営された本格的な都は廃棄物などで汚れていた。

環境問題だけではなく、輸送路も不便この上なかった。[田上山→琵琶湖→瀬田川→宇治川→小椋池→木津川→奈良山越え→佐保川→初瀬川→米川] というあまりに長い経路をたどって運び込まれた柱材は、中枢の施設建造だけでも 2000 本を超える<sup>2</sup>。寺を瓦葺きにするため 10 万枚以上の瓦も焼かなくてはならない。

理念と技術の乖離は、盆地北部への遷都を余儀なくした。

<sup>1</sup> 千葉県市原市神崎稻荷神社境内。深さは約 35 m。上総掘りにて掘削。菊地・地引・仲井「帝京平成大学上総掘りプロジェクト」(『帝京平成大学紀要』Vol.18,2006 年 12 月)

<sup>2</sup> 田中琢編「造営用材の調達」(『古都発掘—藤原京と平城京—』岩波新書 468,1996 年 11 月)

## Ⅱ-ⅱⅲ. 平城京の水源地に構築される瓦窯・巨大工房

藤原宮の水源地であった岡寺龍蓋寺の義淵（入唐し法相を学ぶ）のもとで学んだ行基や良辨が、ともに佐保川の水源地である御笠山に浄居山坊を設けていることについては注目すべきである。その後、ふたりはそれぞれの立場から東大寺創建に尽くすことになるが、土木事業の能力に秀でた彼らは水資源の重要性を認識しつつも、ゴミ処理のノウハウは持ちあわせていなかった。

そもそも、藤原宮で3~5万人であったものが平城京では10万人以上に膨れあがっていく。上水道・下水道・廃棄物処理などの基本設計ができていない新都市での生活は、現在の難民キャンプのような様相を呈した。水を沸かすことも不自由な生活を強いられ、痘瘡で倒れた藤原四兄弟の例にみるように流行病に対してきわめて脆弱な都市空間になっていた。そこに、6世紀末から続いてきた高層建築の黄金期が到来し、新都には礎石の上に巨木を置き瓦で押さえる巨大建造物が次々に建てられていく。

『続日本紀』和銅元年〔708〕2月元明天皇の詔に「三山鎮をなし」とあるように、平城宮は東西と北方を神山に守られた地形であった。しかし、それらの山々には瓦窯が築かれた。平城宮に使われた瓦だけでも、約五百万枚が必要であった。歌姫瓦窯、歌姫西瓦窯、山陵瓦窯、音如ヶ谷瓦窯、押熊瓦窯、乾谷瓦窯、中山瓦窯、市坂瓦窯、梅谷瓦窯（興福寺）、瀬後谷瓦窯、荒池瓦窯（東大寺）などが築かれ、それらは佐保川や秋篠川の上流域の環境を破壊した<sup>3</sup>。

瓦窯やタタラでは、大量の燃料を消費する。たとえば、タタラで鋼大塊1tを得るためには、砂鉄24t、木炭28t（薪100t）が必要であるとされる<sup>4</sup>。鉦山事故に関する靈驗譚（下13）は、国家をあげて産業革命に奔走していた奈良時代ならではのニュースである。また、地獄に導かれた智光は赤く焼けた鉄の柱を見ることになる（中7）が、「東の山」で大仏などを鑄込む光景を目にしている都人にとって、真っ赤になって溶融する金属をイメージすることは容易であったに違いない。山の木は、生活のための煮炊きにも切り出される。山の緑は奪われ、地中を流れる水にも大きな変化があっただろう。

都の整備がある程度まで進んだときに、聖武天皇は佐保川上流域に東大寺の創建を命じる。近隣には興福寺の建設も行われていた。大寺院の建立や仏像・

<sup>3</sup> 上田正昭編「どこで平城京の瓦を焼いたのか」（『平城京の風景』1997年9月、文英堂）

<sup>4</sup> 桶谷繁雄「鉄を作る」（『金属と日本人の歴史』講談社、1965年7月、講談社学術文庫1772）

鐘などを作るためには、大量の砂鉄や材木を必要とする。東大寺大仏は、天平19年[747]9月に鑄造が始まる。鑄造関係で延べ514902人、建築関係で1665071人が従事した（『東大寺要録』）。

天平宝字8年[764]、称徳天皇が金銅の四天王と寺を建立することを誓願した。薬師寺の傍らを流れる秋篠川の上流、右京一条三坊・四坊に建てられることになる西大寺である。

### Ⅲ. 聖武天皇以降の時代<靈異記が描こうとした「現在」>

薬師寺から見えたであろう平城京の風景と靈異記に描かれた世界とでは、大きな隔りがある。

たとえば、馬の問題がある。景戒は少なくとも二頭の馬を飼育していたが、どこで飼育していたのであろうか。もし秋篠川周辺の草を飼料として使っていたならば、西大寺や唐招提寺の造寺・造仏にともない、瓦窯からの廃棄物や銅・水銀などの有毒な汚染物質、さらには工人たちによる生活排水の影響を受ける。加えて秋篠川は西市の堀川として運送にも使用されたため、上流域に東大寺や興福寺をもつ佐保川と同じように日本で最も汚れた川になっていたのではないか<sup>5</sup>。川の汚染は、近隣の井戸水の汚濁も招いたことであろう。

平城京右京六条二坊に位置する薬師寺は、朱雀大路や西の市にも近いところにある。こちら一帯は平城京の商業地域であり、諸国から調を運んできた人たちが病に倒れたり、奈良時代後半期における度重なる洪水や飢饉で乞食になったりした者が多く住み着いていた<sup>6</sup>。薬師寺の正東門に坐し日摩尼手の名を称礼していた盲人もそのような人々のひとりであった（下12）。周辺には大陸からの渡来人が住み、鑑真一行の招来にも彼らは少なからず関与したであろう。薬師寺に隣接するような位置にある唐招提寺の金堂が宝亀年間〔770-780年〕からの建立とすれば、景戒は建築の槌音を聞きながら職務に励んでいたことになる。

靈異記説話は、本朝ではじめて造営された都市の生活を点描している。確かに山の修行者が重視され、桓武天皇との関わりから寂仙が大きな役割を果たしている（下39）。しかし、光仁朝における山林修行を重視する政策<sup>7</sup>は都にお

<sup>5</sup> 杉山二郎『大仏以降』学生社、1986年7月

<sup>6</sup> 「東西の市の頭に生を乞ふ者衆し」（『続日本紀』天平宝字8年3月22日）

<sup>7</sup> 『続日本紀』宝亀元年10月

いて求められた山の仏教であり、修験の威力は都人から憧憬されたものである。聖徳太子（王法仏法の始原）一役行者（山）一行基（里）という排列は、三宝絵・往生極楽記・今昔物語集あるいは慈覚大師伝などが踏襲する菩薩伝であり霊異記もその系譜に入るが、山一里一海の仏教は全国に展開する円仁の寺院創建譚にみる如く、相互に補完しつつ天皇制と深層においてリンクされている。

大仏鑄造の頃は銅が巷に氾濫していた。鍛冶職の中心地であった和泉国日根郡に住んでいた盗人は、寺の銅を盗んでそれを帯にしておおびらに売っていた（中 22）。都には夜盗が出没するため、夜警が行われていた。しかし、平城京左京五条六坊にあった葛木の尼寺の弥勒菩薩（銅像）は盗まれ石で破壊されている（中 23）。<sup>いかるが</sup> 鵜の村岡本の尼寺の銅像六体も盗まれている。菩薩の池で一体は発見されたが、塗られていた金は剥げ落ちていた。私鑄銭をつくるために盗んだが思い煩い棄てたのであろうとされる（中 17）。河内国利苜<sup>とかり</sup>の優婆夷は、昔盗まれた梵網經二巻・般若心經一卷を東の市で千五百文を払い買い取っている（中 19）。

東大寺造営は、仏法に基づく国家の繁栄をもたらすものではなく、むしろ万年通報 [760 年] から神功開宝 [765 年] の改鑄に明らかなように貨幣経済に混乱をもたらし、新都是都市型犯罪の温床と化していた。

霊異記は、都市生活における闇の部分を描いている。

#### IV. 国家の生成と情報革命＜霊異記の歴史認識と都市の形成＞

6 世紀の前半期に仏教が伝来して以来、文字・宗教・思想・法（律令）・サイエンス・マネージメントなどが急速に発展した。これらは、国家創建の必須条件であり、霊異記説話群成立の基盤にもなっている。霊異記は、以下のことを諸処に描くことでリアリズムの筆を獲得している。

- 度量衡（計測するための基準）
- 宗教 死後の世界観（善悪の認定）
- 風俗・民俗
- 組織の構築と運用（マネージメント）
- 木工・金工
- 銅・鉄・金鉱山の開発と精錬
- 徴税システム（法制・戸籍台帳・組織）

- 田畑の開墾（灌漑用水、水争い）
- 貨幣経済（偽造通貨の流通）
- 運輸機構の整備
- 官僚組織

しかし、霊異の展開とリアリズムとは相反する作用をもたらす。

霊異記に描かれる霊験譚は、水戸黄門型説話と基本構造が近似している。すなわち、霊験によって階層を超えた栄達に浴することはなく、「仏の理」の発現によってヒエラルヒーはさらに整序される。黄門様の印籠によって幕藩体制（近世天皇制）の歪みが是正され土農工商それぞれが本来の道を進み始めるように、霊異記においても法華経をはじめとする経典などに基づく霊験によって理想社会（王法＝仏法）の実現が図られる。

霊異記の仏教霊験譚がこのような構造を持つことと、説話の背景に社会制度が書き込まれることとは無縁ではない。

## V. 平城京の環境と霊異記説話

### V-i. 足萎えの子を遺棄する母親

行基が足萎えの子を淵に棄てよと命ずる話（中 30）について考えてみよう<sup>8</sup>。

河内国若江郡川派（川俣）里に、ひとりの女人がいた。子供を連れて行基大徳の法会に来て法を聞いた。その子は、<sup>せ</sup>泣き謹めて法を聞かせなかった。十余歳になるまで歩くことをせず、乳を飲み、絶え間なく物を喰っていた。

行基は、母親にその子を淵に棄てよと告げた。しかし、母親は棄てることができなかった。明くる日も母親は子を抱いて法会に来た。子は<sup>せ</sup>泣き、聴衆は法を聞くことができなかった。大徳は子を淵へ棄てよと責めた。

母が子を淵に棄てると、子は水の上で足をばたばたさせ眼を大きく見開いて「あと三年は前世の負債を徴収してやるつもりであったのに」と言った。

話の舞台となった東大阪市川俣は、現在では長瀬川と第二寝屋川に挟まれた低湿地であるが、川の氾濫に悩まされてきた地域であった。川俣に隣接する「放

<sup>8</sup> この話の下敷きとして水に関わる伝承があり、子供の描写には神性がひそんでいるとも考えられる。→小泉道『日本霊異記』（新潮日本古典集成 67,1984年12月）中巻三十頭注

出」には、以下のような地名由来譚が残っている<sup>9</sup>。

昔は「はなてん」と読まずに、「はなちでん」から「はなちで」と称していた。この地域は、古代から中世にかけて河内湖からの湖水が大和川や寝屋川の流れと合流して淀川（現在の大河）に注ぐあたりに位置しており氾濫が絶えなかった。仁徳天皇の頃にも旧大和川の氾濫が多かったため、この地に樋を作りその水を調節して水を「放」ち「出」したところから、その名が起こったともいわれている。

生駒山の西に位置するこの地一帯は行基集団が活躍した地域でもあり、河内国の人大初位下河俣連人麻呂が錢一千貫を盧舎那仏の智識に奉ったことでも知られている<sup>10</sup>。このように地域的にも東大寺造営に関わりが深かったが、工業技術の先進地帯であることによる環境汚染や大和川の氾濫によって流れてきた水に重金属が含まれていたという事情があったのかもしれない。

この子の病の原因を特定することはできないが、水銀などが流れ出した奈良の都においても、怪我や病に苦しむ人々がいたと考えられる<sup>11</sup>。このような不幸な状況に陥った場合、古代では子を遺棄したこともあった<sup>12</sup>。本話の淵源をたどればヒルコを水に流したイザナギ・イザナミにまで辿り着くのであろう。

## V-ii. 経済圏内で機能する寺社勢力

そもそも本話の論理に従えば、この子は因果の理により過去の債務を取りに来た借り主の仮の姿である。川に遺棄されたのは、この世の人間ではない。

話末詞書の趣旨は、「他人から錢を借りたら返せ」ということである。基盤にあるのは、貨幣社会であり、そこには利子の問題が絡んでいる。中世の寺社勢力が、利子請求権の正当性を仏の法によって保証し、未払いをすると地獄に墮ちると説いたことはよく知られている<sup>13</sup>。利子の適正な徴収を正当と捉える

<sup>9</sup> [http://www.city.osaka.jp/joto/shokai/05\\_04.html#4-3](http://www.city.osaka.jp/joto/shokai/05_04.html#4-3)

<sup>10</sup> 『続日本紀』天平19年9月

<sup>11</sup> 杉山二郎「緊急を要した平安京遷都の謎」（『大仏以降』学生社、1986年7月）  
鈴木一舟『糞尿史—遷都は糞尿汚染からの逃避だった—』公共投資ジャーナル社、2000年2月

<sup>12</sup> 米山孝子「『日本霊異記』中巻第三十縁考—「子を縁に捨てる」説話の成立事情—」（『佛教学』13号、1989年3月）

<sup>13</sup> 伊藤正敏『中世の寺社勢力と境内都市』吉川弘文館1999年5月。  
伊藤正敏『日本の中世寺院』吉川弘文館2000年2月。

霊異記説話群からは、奈良朝末期に金融ビジネスを保証するような機能を仏法が果たそうとしていたことがうかがえ興味深い。

大寺院は、情報ネットワークのハブの役割を果たし、そこを生活の拠点とする人々は政治・経済の変化に即応し、教団の維持発展を図ろうとする。

薬師寺の僧行信と八幡神宮主神大神朝臣多麻呂が厭魅の術を行い、それがために詔が発せられ、行信は下野薬師寺に配流されたという『続日本紀』の記載<sup>14</sup>からは、薬師寺内において政争がらみの呪法を研究していたことがわかる。

薬師寺僧華達と範曜が博打をして争い、その結果殺人事件を起こしたという同書の記事<sup>15</sup>からは、薬師寺の僧たちが貨幣経済の渦に巻き込まれ、世俗と変わらない無明の闇の中を彷徨<sup>さまよ</sup>っていたことがわかる。

いずれにしろ、本話が語られる相手は、銭の貸し借りをする人々であって、閉鎖的な村落共同体の中で暮らす善男善女ではない。遠国からやってきた見知らぬ人々が行き交い、決済が銭によってなされ、借りても逃げきれるような貨幣経済圏で暮らす人々に説く話である。

このように考えれば、「行基」「病を背負って生まれた子」「借金返済」などの道具立ては、国際的な商工業都市として発展しつつある平城の都にふさわしいものとなっていることが理解できよう。

### V－iii. 罪の浄化

仏法が商行為に関する法体系を補完するものとして機能していることは、新しい時代の幕開けとしてふさわしいといえる。罪を自覚した人々や悪果を断ち切ろうとしている人々にとって、罪の浄化は「法会」を営むことによって可能となる。もちろん、法会は教団の運営と密接に結びつき、そこには広義の商行為（知と情報の商品化）が介在する。

〔病を背負った子〕＝〔悪因悪果の法則により自分に災いをもたらす存在〕＝〔法会に参じ、水に流し因果の法則を絶つ〕という構図は、罪の浄化の問題でもある。霊異記は法相の教義に則するため、悪人は心に仏性を宿さない闍提であり殺しても良い（中 22）として、永劫の墮地獄とする<sup>16</sup>。平安時代初期に最澄と徳一との間で交わされた悉有仏性に関する仏性論議は夙に名高いが、編者

<sup>14</sup> 『続日本紀』天平勝宝 6 年 11 月 24 日

<sup>15</sup> 『続日本紀』天平宝字 4 年 12 月 22 日



景戒の感覚は唯識の法理ではなく都人の生活みやこびとに基づくものであった。靈異記の仏法は、教理による世俗法の裏付け、あるいは教団の護持発展(仏や経典・法・僧などの威力の顕現を説く)が主になっており、基本的には法相であっても「天台智者の間術」(下序・下22)であっても差し支えない。

靈異記に登場する人々は、いかに商行為に身をやつし、錢によって善因善果を得ていったことか。

## VI. 靈異記における井戸<聖徳太子—聖武天皇—光仁天皇>

藤原宮や平城京の造営にあたって地下の水位や湧水量などを調べ、十万人規模の人口を支えるだけの水を地下から汲み上げることができるという観測はしていたであろう。藤原宮の時代には積み上げ式井戸を含め井戸枠構築のすべての技術が出揃うという事実は重要である<sup>17</sup>。しかし、平城京における土地整備と巨大寺院の建立は、造営に携わった官人たちの予想をはるかに超えるものになっていった。

天平17年[745]6月に平城京において東大寺大仏の造営が再開され、天平19年[747]9月に鑄造が始まる。それから約5年間で銅500t、金440kg、水銀2.5t、炭7162石、人間250万人を要した巨大公共事業を終える<sup>18</sup>。この工事は、盆地の地下水系にも著しい影響を及ぼしたに違いない。

金鷲行者の堂のある若草山・御蓋山・春日山一帯は水源地帯であり、この地における重金属の汚染は都の第一帯水層を直撃する。東大寺修二会は、大仏開眼会が行われた天平勝宝4年[752年]に始められ、現在まで一度も途絶えることなく伝えられている。水は若狭の遠敷明神おにゅうみょうじんにまつわる二月堂本尊に献じられたと伝えられ、若狭小浜市の神宮寺では今もこの井戸に水を送る「お水送り」の行事が行われている。これは、佐保川や都の地下水の浄化を祈念しての行事でもあっただろう。

東大寺が建立される以前、この水源の地に建てられていた堂に置かれた執金剛神の脛から光が発せられ、それを見た聖武天皇は金鷲行者を敬礼するように

<sup>16</sup> 仲井克己「彼岸にみる罪と罪人—『日本靈異記』に於ける救済の構造—」(『説話文学研究』25号、1990年6月)

仲井克己「罪人の心象風景—始原としての日本靈異記—」(『国文学研究』92集、1987年6月)

<sup>17</sup> 鐘方正樹「井戸の歴史的展開とその背景」(『井戸の考古学』同成社、2003年12月)

<sup>18</sup> 千田稔「大仏開眼はどのように行われたか」(『平城京の風景』文英堂、1997年9月)

なった(下 21)。その聖武天皇の時代に、井戸に関する歌が都で流行していた<sup>19</sup>。

諸楽の宮に二十五年天の下治めたまひし勝寶応真大上天皇のみ代に、天の下挙りて歌詠ひていはく

朝日さす 豊浦の寺の 西なるや おしてや

桜井に おしてや おしてや 桜井に 白玉沈くや 吉き玉沈くや おしてや おしてや

しかしては 国ぞ栄えむ 我家ぞ栄へむや おしてや

かくのごとくに詠ふ。

後に帝姫阿部の天皇のみ代の、神護景雲の四年の歳の庚戌に次れる年の八月四日に、白壁の天皇、位に即きたまふ。同じ年の冬の十月一日に、筑紫の国、亀を進り、改めて宝亀の元年として、天の下を治めたまふ。(下巻 38)<sup>20</sup>

蘇我稲目によって建立された豊浦寺は、元興寺(飛鳥寺)とともに本朝仏法の始原にあたる。桜井には雄略天皇の磐余宮があり、靈異記巻頭話と首尾呼応する。

光仁天皇は、和銅2年[709]10月生まれであり、聖武天皇の在位(神亀元年[724]—天平勝宝元年[749])期間中は青年期にあたる。歌が流布した時期は東大寺創建の前か後かという問題はあるが、靈異記では、聖徳太子—聖武天皇の系譜に基づき(上5)、東大寺を創建し国分寺・国分尼寺体制に則した仏国土を夢見た聖武天皇の時代に、仏法発祥の地である豊浦寺の西にある桜井の白玉と白壁天皇とを結びつけ国家浄福を表相する歌が流行したということになる。

催馬楽で「榎の葉井」とされる井戸底に白い玉が沈んでいるという寿詞は、井戸水の浄化との関連から考察すべきである。奈良時代に平城京二条三坊の井戸底に敷かれていた礫は、秋篠川の河岸からチャートを主体とする礫を採取していた<sup>21</sup>。これらの礫は二酸化珪素を含むため、淡緑灰色や淡青灰色になることもあった。井戸の底に白い石が沈んでいるという歌のイメージは、平城京の

<sup>19</sup> 『続日本紀』光仁天皇即位前紀に次の童謡が流行したと記される。

葛城寺の前なるや 豊浦寺の西なるや おしとど としとど 桜井に白壁沈くや 好き壁沈くや おしとど としとど 然しては国ぞ昌ゆるや 吾家ぞ昌ゆるや おしとど としとど

<sup>20</sup> 小泉道『日本靈異記』(新潮日本古典集成 67,1984年12月)

<sup>21</sup> 鐘方正樹「井戸の各部名称と付帯施設」(『井戸の考古学』同成社,2003年12月)

井戸に通じていた。

『播磨国風土記』『常陸国風土記』などでは、清く澄んだ水が湧き出る井を天皇と結びつけて語っている。それらの井戸の中には、疲れを癒し病を治す靈力があると信じられているものもあった。

井戸から湧き出す清冽な水に都の浄福を祈り、平安という新時代を寿ぐ——靈異記の歴史認識の原点がここにある。

## VII. 靈異記の世界

説話集は集合知であり、集の編纂は過去の記憶の在り方を問うひとつの方法である。靈異記は、仏教という衣を纏い律令時代のさまざまな事象を仏の理によって組織化した。

その際、「理」を「知」によって導いている。「知」は、事象に遍在する仏の理を知りそれに瞠目するという機能を果たすが、仏教説話集の編纂行為が法施の菩薩行であるため、「知」は衆人の視線と交わる。

院政期に編まれた今昔物語集は、話末詞書を「思」で導く。ときには惑の世界に迷い込み思考を停止させてしまう今昔物語集編者の基本姿勢を端的に表すことばと言い得るが、「知」と「思」の違いが両書の決定的な違いといえる<sup>22</sup>。

しかし、平安時代の初めと終わりに編まれたふたつの説話集は、記憶の在り方を問うという点では一致している。靈異記は発展しつつある貨幣経済の中で新時代の在り方を問い、今昔物語集は時代の変革点である院政期において、仏法部と世俗部を並列にすることで三国の今と昔を記述した。

軽の諸越<sup>ちまた</sup>の衢で天の鳴神を呼び叫ぶことで始まった平安朝黎明期の説話集は、院政期に至り同じ地域にある軽寺で幕を閉じる（今昔巻31第35）<sup>23</sup>。豊浦寺を聖地とした靈異記ではあったが、今昔物語集まで敷衍して見てみると交易の場で結ばれていることになる。両書の基本的な性格を象徴している。

<sup>22</sup> 仲井克己「思惑を誘う説話集——世俗部から見た『今昔物語集』の可能性——」（『中世文学』44,1999年5月）

<sup>23</sup> 藤原鎌足の子定恵が元明天皇の陵として決めた場所。『今昔物語集』では、本話に続き、国土安泰と豊穡を祈念する近江の鯉一杵と続き全巻を閉じる。→ 仲井克己「今を寿ぐー『日本靈異記』と『三宝絵』に内在する矛盾ー」（『九州帝京短期大学紀要』第9号、平成9年2月）

前田晴人「懼とは何か」（『日本古代の道と懼』吉川弘文館、1996年2月）

